成瀬巳喜男のファンダメンタルズと疑問とその解明（4）（承前）

同年（1910年）生まれの二人の東宝のプロデューサーについては次のように特徴づけられるのではないでしょうか。

プロデューサー　藤本真澄（フジモト サネズミ）	プロデューサー　田中友幸
・慶応大卒業後松竹蒲田撮影所に入社、1937年森岩雄に誘われ、P.C.L.に入社、1940年助監督になるが1941年出向先の南旺映画で製作に転じる。 ・1947年東宝争議時の制作責任者で警官導入の責任を取り退職、1949年藤本プロを設立し各社の制作を請負う。東宝で制作中断中の今井正「青い山脈」を引き受けて大ヒットさせる。1951年に東宝へ復帰。 ・1950年代の日本映画黄金時代では次々にヒット作を量産した。藤本は『社長シリーズ』などのサラリーマン喜劇、『若大将シリーズ』『お姐ちゃんシリーズ』などの青春もの、セクシー・コメディ、成瀬巳喜男監督作品などの文芸作品を主として製作しドル箱路線を確立して会社を支えた。 ・1955年取締役制作本部長、1962年専務取締役を歴任、その後東宝本体の副社長、東宝映画社長となるが、1975年にはその座を田中友幸に譲り、東宝取締役に戻る。 ・予算や撮影日数をオーバーする監督を信用しないと著書で述べ、1958年黒澤明「隠し砦の三悪人」で大幅な予算・日数超過が出て以降、黒澤作品のプロデュースは行っていない。また、豊田四郎監督にも不信を抱き東宝の役員になって一度も一緒に仕事をしていない。生涯独身を貫く。	・関西大卒業後の1940年に大宝映画に入社、1941年合併に伴い東宝映画株式会社へ転じ、1944年東宝東京撮影所に入る。演劇活動を経て映画入りしたという話もある。 ・1947年東宝争議に伴い退社し、映画芸術協会に身を置くが1952年東宝へ復帰。このとき、藤本真澄は第一線で活躍中で、その助手も経験している。 ・健全市民カラーの強い東宝にあって、ひたすら非日常の世界、豪快な男性路線（時代劇を含むアクション映画、怪獣・SF映画、戦争・パニック映画）にこだわり続けた。東宝社内で異端派に終わるべきところ、数回にわたって日本映画の興行成績記録を更新するという空前絶後のヒットメーカーぶりを発揮。結局は会社の色まで染め替えてしまった。とりわけ『日本沈没』(森谷司郎監督　1973) で大ヒットを飛ばして以後は東宝系の映画館主から絶大な信頼を受けた。黒澤明作品も、田中がプロデュースした1960年から1980年にかけての時期は娯楽性が強く、大ヒット作が多い。東宝映画の社長に藤本真澄の後任として就くが東宝本体の役員に就くことはなかった。 ・夫人の女優・中北千枝子は、主に藤本真澄のプロデュースした成瀬巳喜男作品の常連的存在。

＊東宝の創業者は、現阪急電鉄を始めとする阪急東宝グループの創業者である小林一三（1873~1957）で、1932年に設立されます。1966年から1974年まで社長を務めた松岡辰郎は小林一三の次男、1977年から1995年まで社長を務めた松岡功はその長男であり現社長の松岡宏泰（2022年5月就任）は松岡功の長男と基本的には一族経営の企業です。また、松岡功（1934~）はテニスプレイヤーとしても活躍し1956年のデビスカップの日本代表にも選出、次男松岡修造も元プロテニスプレイヤーです。

さて、話を成瀬巳喜男本人に戻すと成瀬は、1951年の「銀座化粧」「めし」以来、「おかあさん」(1952)「稲妻」(1952)「あにいもうと」(1953)「晩菊」(1954) と調子を上げて1955年の「浮雲」で一つの頂点に立ったと考えられます。その中で注目されるのは、林芙美子作品の映画化です。成瀬が林芙美子を意識していることが判るのは、1934年松竹蒲田で24本目のサイレント作品「限りなき舗道」（助監督は渋谷実、山本薩夫という顔ぶれ）をとった後で、本人の語ったところによれば、「ここで約束通り次にやらせてもらう準備にかかりましてね、林芙美子の短篇でカフェの女給の話、僕好みのものなんです。池田實三と箱根にこもって脚本にした。全然思い通りのことをしましたね」とあります。しかし、その直後にP.C.L.からの誘いの話があったり、城戸四郎との確執もあり映画化は実現しませんでした。初めて映画化されたのが1951年東宝での

「めし」ですが、それから1962年までに6本の林芙美子原作の作品を監督することになります。それほど林芙美子の作品と成瀬の関係は非常に深いものがあります。そして、そこに東宝での成瀬組という強力なスタッフ集団が出来上がります。（このことについては後でふれることにしますが）

林芙美子は1903年下関生まれ（北九州門司生まれの説も）、一躍文壇で流行作家の地位を得るきっかけとなる「放浪記」は自伝的小説で、幼少期からの貧乏、そして長じてからの奔放な私生活のありさまが赤裸々に描かれています。この作品が、雑誌に掲載されたのが1928年、単行本として出版されたのが1930年のことです。まだ戦前も戦前、それどころか100年近い昔の話です。成瀬作品「放浪記」で描かれる林芙美子の流行作家になるまでの生活は、成瀬作品に出てくる市井の人たちの生活よりはるかに貧しく惨めなものです。こうした貧しさもさることながら、精神的支えとなるはずの結婚生活（実際には内縁関係）も、何人もの男性と破綻続きです。

成瀬は、1937年当時の大スター千葉早智子と結婚し一児をもうけますが、1940年に早々に離婚してしまいます。今でいう格差婚に近いものであったと推測できます。幼少時からの貧乏暮らし、そしてその後の孤独と忍従の生活は、林芙美子の半生とつながるものがあり、成瀬としては共感を呼ぶものであったのではないでしょうか。（成瀬と千葉早智子との間に生まれた一子は千葉が引き取り、後年「自分の一年下で東宝で助監督を務めていた」と恩地日出夫は語っています。）成瀬にとって林芙美子原作の最初の映画化は先にも述べた「めし」ですが、映画化が進んでいた1951年に林芙美子が急逝したため未完の絶筆になってしまいます。これは朝日新聞に150回の予定で連載されるはずでしたが、97回で終わってしまいます。ですから、林芙美子がどういった結末を考えていたか判らないのです。その結末については様々な憶測なり、考えがあったことが分かります。また、藤本真澄プロデュースで企画された映画化で、当初監督が予定されていたのは成瀬ではなく千葉泰樹でした。しかし、千葉泰樹が病気になり取り掛かることができず、成瀬にお鉢が回ってきます。成瀬は「ホンを見てやってもいいじゃないかと思って- - - - 僕のいいように書き換えてましたが」と語っています。

ここで、「めし」の脚本を担当した二人の脚本家の一人、井出俊郎の回想を取り上げてみましょう。井出俊郎は1910年今の唐津市生まれ、市川崑によれば洒脱な皮肉屋で、あまり紙に書かず喋ってばかりの語りの名人と言われた人物です。未完に終わった原作の結末についてですが、これは倦怠期を迎えた夫婦（原節子と上原謙が夫婦役を演じる）が離婚の危機にあるのですが、その結末です。井出俊郎は「千葉泰樹さんと相談して田中澄江さん（共作の脚本家）と僕でラストのストーリーを作ちゃった。そこで揉めましてね。僕は絶対離婚させるべきだと言ったんです。そうしたら会社は（中略）絶対離婚しないと言うんです。林さんもそう考えていたはずだと。田中さんは『そうなの、離婚はだめ？』とか言ってはっきりしないんです。ちっとも自主性がない」と言い、離婚しない結末は会社側の強い意向であったことを明かしています。大変興味深いので、井出俊郎の証言をもう少し引用します。「（『めし』の）ホンを書いた後、千葉（泰樹）さんが病気になちゃって、それで延期しようと言うことになったけど、会社は無理に原作を押さえているから延ばすわけには行かない。相手も朝日新聞だから若い監督じゃダメだというんで成瀬さんに頼んでみようということになった。（中略）森岩雄さんが『監督としては格が上の方に代役をお願いするのは大変恐縮ではございますが、引き受けてもらえないでしょうか』と頼んだんです。（筆者注：成瀬巳喜男は千葉泰樹の五歳先輩）そうしたら成瀬さんはイヤとも言わないで『やらせていただきます』と引き受けたんです」という経緯が述べられます。そして、撮影現場に立ち会い、「あんまり熱心にやらなかったのが良かったのかもしれません。監督がギラギラしてたらイヤでしょう。成瀬さんは逃げるようにしているんですよ。そこがいいんです」と変な褒め方をします。しかし、会社内部では、「成瀬巳喜男と決まったら会社の執行部（筆者注：営業関係の部署のことを指すものと考えられます）が大反対だったんです。営業担当重役が巻紙に『営業部一

同を代表して、成瀬巳喜男接待反対、千葉泰樹が元気を回復するまで延期すべき』と書いてきた。けれども『めし』は当たったんです。そうしたら、営業部は手のひらを返したように林芙美子ものは成瀬でやれと言うんです。それで、成瀬さんが『妻』(1953) をやると今度は成瀬で妻ものをやれと言うんです。けれども成瀬さんは何も言わないで、その中で作っていた。僕は成瀬さんは大物だと思いますよ。大人なんですね。小津さんだったら絶対に代役なんか引き受けませんよ」と言います。得てして名作誕生の陰には、思わぬ出来事から何らかの連鎖反応を起こすということがあるようですが、『めし』もその典型例のようです。

東宝での主だった成瀬巳喜男監督製作チームの概要を示すと下記の通りとなります。（詳細についてはまた後で触れることにします）製作を田中友幸が担当したこともあったり、各スタッフが会社の製作スケジュールに沿って成瀬作品から離れることもありますが、下記に示したのだ成瀬作品の最強メンバーと言えるのではないでしょうか。

プロデューサー
藤本真澄
(1910~1979)

脚本家
井出俊郎
(1910~1988)

撮影
玉井正夫
(1908~1997)

脚本家
田中澄江
(1908~2000)

美術
中古智
(1912~1994)

脚本家
水木洋子
(1910~2003)

音楽
斉藤一郎
(1909~1979)

録音
藤好昌生
(1913~1995)

＊成瀬作品に参加した脚本家としては、上記の3氏の他にも橋本忍、松山善三、笠原良三、山田信夫、菊島隆三といった日本を代表する脚本家がいます。

＊成瀬作品の助監督と言えば川西正純（正義）が有名ですが、岡本喜八、石井輝男（後年、高倉健主演「網走番外地」シリーズの監督）、須川栄三といった後の日本映画界を支えた方々がいます。川西正純は1958年に「眠狂四郎無頼控魔剣地獄」で監督デヴュウ（主演は鶴田浩二、監督昇進祝いに森繁久彌、山田五十鈴が特別出演）したが、興行的に失敗し企画部へ転籍となりました。1971年に東宝を退社し、その後はフリーとしてテレビ界で活動していますが、その後の消息ははっきりしていません。

編集
大井英史

助監督
川西正純
(1914~)